

大学等シーズ・ニーズ創出強化支援事業  
(イノベーション対話促進プログラム)  
実施状況報告書

平成26年4月10日

国立大学法人徳島大学

# 内容

1. 当初計画の概要.....	2
(1) 当初設定した事業の目的等、計画の概要.....	2
(2) 実施体制.....	2
2. 業務の実施状況.....	3
(1) 事業全体の概要.....	3
(2) 実施したワークショップの詳細.....	5
① 1回目のワークショップについて.....	7
② 2回目のワークショップについて.....	12
③ 3回目のワークショップについて.....	16
④ 4回目のワークショップについて.....	22
別紙「参加者の状況」.....	26
3. 本事業実施により得られた知見・課題等.....	27
(1) 本事業による一連の取組を通じて得られた知見・課題等.....	27
(2) 今後の活動への展望.....	28
4. その他.....	29

## 1. 当初計画の概要

### (1) 当初設定した事業の目的等、計画の概要

#### 【 補助事業の目的 】

全国に先駆けて人口減少の課題に直面している徳島県において、「健康長寿社会をつくるための革新的イノベーション」というワークショップのテーマを設定し、企業・行政・NPO・医療機関など各セクター参加者を集め、フューチャーセッションによる創造的な対話を行い、これまでにないアイデアを生み出すことが目的である。

#### 【 本年度の事業の目標及び方法 】

##### ① ワークショップ開催

テーマ「健康長寿社会をつくるための革新的イノベーション」COI STREAM 関連ビジョン「少子高齢化の先進国としての持続性の確保」、大学独自のシニア群に立脚した社会ニーズとのマッチングに関する出口を見据えた仮説を立てたうえで、4回開催し、ビジョン実現に向けたイノベーションのアイデアづくりを取りまとめる。

##### ② 発掘されたアイデアが現場のニーズに合っているかなどの検証

自治体、企業、医療機関、NPO、地域住民等へのアンケート調査による。

##### ③ アイデアの技術的実現可能性の検証

学内研究者及び学外専門家へ意見聴取並びに自治体、企業、医療機関、NPO、地域住民等へヒアリング

##### ④ 事業化の実現可能性の検証

特許等調査によるパテントマップの作成、マーケティング調査の実施

##### ⑤ 報告書のとりまとめ

### (2) 実施体制

(1) 事業実施責任者：徳島大学産学官連携推進部副部長 織田 聡

(2) 実施体制（事業項目別）

#### ① ワークショップ開催

（実施場所：徳島大学外）

（担当責任者：徳島大学地域創生センター長 吉田敦也）

#### ② 発掘されたアイデアが現場のニーズに合っているかなどの検証

（実施場所：徳島大学産学官連携プラザ）

（担当責任者：徳島大学産学官連携推進部副部長 織田 聡）

#### ③ アイデアの技術的実現可能性の検証

（実施場所：徳島大学産学官連携プラザ）

（担当責任者：徳島大学産学官連携推進部副部長 織田 聡）

#### ④ 事業化の実現可能性の検証

（実施場所：徳島大学産学官連携プラザ）

（担当責任者：徳島大学産学官連携推進部副部長 織田 聡）

## 2. 業務の実施状況

### (1) 事業全体の概要

#### ワークショップ開催

##### 第1回ワークショップ

お互いの活動やこれまでの成果、そのもととなる信念や価値観について共有し合い、アイデア構築の基盤となる参加者間の相互理解及び信頼構築を行った。

##### 第2回ワークショップ

集合知の形成を主目的とし、健康長寿に関する徳島県内の課題や技術・制度・地域での取り組みについての情報や経験知を参加者間で高度に共有する場とした。

##### 第3回ワークショップ

ビジョンを参加者間でつくることを主目的とし、どのような社会が実現されれば少子高齢化先進県として高齢者はじめ県民の幸せを持続できるのか、またどのようなプロセスによってそれは可能になるのかを、対話によって明らかにした。

##### 第4回ワークショップ

健康長寿社会に向けてどのようなイノベーションが起きればそれが可能になるのかを、技術・制度・ライフスタイルの各側面からアイデアを創出して全体で共有し、さらにそこから社会のニーズが高く実現可能性が高いものを参加者間で絞り込む作業を行った。

今回のワークショップではNPO法人ミラック（以下「ミラック」という。）に業務委託し実施することとした。また、本事業経費で事業全体を管理するため学術研究員を雇用し、徳島大学産学官連携推進部（以下「産学官連携推進部」という）に配置した。

徳島大学地域創生センター（以下「地域創生センター」という。）とミラックにおいて企画及びその効果・課題・改善点を検証し、ミラック、地域創生センター、産学官連携推進部により運営・実施を行った。

- 実施場所：徳島大学内
  - 蔵本キャンパス：
    - 大塚講堂小ホール
  - 常三島キャンパス：
    - 工業会館、大学開放実践センター3階インテリジェントラボ、
    - 共通教育4号館404講義室リベラホール、カフェテラス
- 徳島大学外：徳島赤十字病院
- 担当責任者：地域創生センター長 吉田敦也

#### 発掘されたアイデアが現場のニーズに合っているかなどの検証

ワークショップを通して、徳島大学の医学部及び歯学部の研究者にヒアリングを行った。徳島県は「糖尿病患者全国1位」というランキングを現実として受け止め、重要な課題であると認識している。そこで、医学部では「糖尿病と未来の健康社会」をテーマとしてニーズ調査を行った。発掘されたアイデアをもとにヒアリングを行ったが、今回行ったワークショップは非常に有用であるという意見が多く、研究者も地域の意見を必要としていることが分かった。しかし、まだまだ、地域のアイデアが産学連携に結びつくのは遠く、引き続き、このようなワークショップを開催し、研究者・地域住民及び企業の底上げが必要であるという課題が得られた。

産学官連携推進部において、教員、コーディネータ、客員教授により実施

- 担当責任者：産学官連携推進部副部長 織田 聡

#### アイデアの技術的実現可能性の検証

健康長寿に関する徳島県内の課題や技術・制度・地域での取り組みについての情報や経験知を参加者間で高度に共有したところで、一般社団法人 re:terra へ国内及び海外における調査の依頼を行った。

”健康長寿社会”に類する指標として国別幸福度のデータを基に検証。「平均健康寿命（健康的生活を送れる年数）」に注目し、心身両面の健康を扱う指標として国別幸福度を参照した。上位には、デンマーク、ノルウェー、スイス、オランダ、スウェーデンが位置し、日本は43位となっている。

そこで、徳島県は糖尿病患者全国第1位との現状を踏まえ健康づくりに対する施策に力を入れていることから、自転車交通が発展しているデンマーク、オランダに注目した調査を行った。加えて、農業国としての地位を築いているオランダと農業県である徳島に比較出来ることがあるのではないかとの仮説を立て事例調査を行い、調査内容を第3回ワークショップにて情報提供した。

産学官連携推進部において、教員、コーディネータ、客員教授により実施

- 担当責任者：産学官連携推進部副部長 織田 聡

#### 事業化の実現可能性の検証

今回、第4回ワークショップにて得られたアウトプットをもとに、技術面のアイデアについて、特許等の調査をおこなった。しかし、残念ながら、現状では先行調査の結果、特許となるようなものは得られなかった。そこで、今後は、この成果をブラッシュアップする機会を作ることが課題として残った。

産学官連携推進部において、教員、コーディネータ、客員教授により実施

- 担当責任者：産学官連携推進部副部長 織田 聡

#### 本事業についての学内外への情報発信の実績

産学官連携推進部において、教員と本事業経費で雇用した学術研究員により実施。特に産学官連携推進部のホームページではワークショップの開催について情報発信を行った。さらには委託業者であるミラツクのホームページでも同様にワークショップの開催について情報発信を行い広く参加者を募った。また、facebook を利用した情報発信を行い、開催風景などもリアルタイムで発信し広く国民に対して情報発信を行った。ホームページと facebook は連携して情報を共有するように設計していたため、複数のサイトから多くの国民に対して還元できるよう工夫を行った。また平成26年2月15日（土）徳島赤十字病院 401 会議室にてシンポジウムを行い、徳大デザインセッション「未来を考える幸福小松島」と称して、これまでの調査内容の情報発信を行った。

- 担当責任者：産学官連携推進部副部長 織田 聡

## (2) 実施したワークショップの詳細

徳島大学では、テーマ「健康長寿社会をつくるための革新的イノベーション」COI STREAM 関連ビジョン「少子高齢化の先進国としての持続性の確保」、大学独自のシニア群に立脚した社会ニーズとのマッチングに関する出口を見据えた仮説を立てたうえで、ワークショップを4回開催し、ビジョン実現に向けたイノベーションのアイデアづくりを取りまとめる計画としていた。

徳島大学の特徴は地域にどのように密着して、県民との対話を行うか、すなわち地域連携を核としたイノベーションの創出であることから、地域との連携に長けた経験を持つファシリテーターを必要とした。そこで、ワークショップの成功のために、ファシリテーターは経験のあるミラックと委託契約を締結し実施・運営等を依頼することとした。

ミラックは「Dialog BAR」、「Gathering」、「design」と呼ばれる3つの手法を用いた“対話の場の提供”及びファシリテーションの実施が特徴で、徳島大学で行う4回のワークショップに取り入れ開催した。

### 第1回ワークショップ

お互いの活動やこれまでの成果、そのもととなる信念や価値観について共有し合い、アイデア構築の基盤となる参加者間の相互理解及び信頼構築を行うために、3部構成とし、Dialog BARを2回、Gatheringを1回行った。

### 第2回ワークショップ

集合知の形成を主目的とし、健康長寿に関する徳島県内の課題や技術・制度・地域での取り組みについての情報や経験知を参加者間で高度に共有するため、第1回ワークショップにて“対話”の経験のある参加者も多くなってきていることから、より密度を高めるため、このワークショップでも2部構成とした。ここではDialog BARを1回、Gatheringを1回行った。

### 第3回ワークショップ

ビジョンを参加者間でつくることを主目的とし、どのような社会が実現されれば少子高齢化先進県として高齢者はじめ県民の幸せを持続できるのか、またどのようなプロセスによってそれは可能になるのかを、対話によって明らかにするため、Designを2回行った。

これまでのワークショップの参加者を中心にメンバーを構成することで、対話によるアウトプットをより精度よくする工夫をして実施している。

### 第4回ワークショップ

健康長寿社会に向けてどのようなイノベーションが起きればそれが可能になるのかを、技術・制度・ライフスタイルの各側面からアイデアを創出して全体で共有し、さらにそこから社会のニーズが高く実現可能性が高いもの参加者間で絞り込む作業を行った。

ここでも第3回ワークショップ同様Designを1回行ったが、このワークショップでは第3回ワークショップのアウトプットの精度をよりよくすることを目的とした。

	第 1 回			第 2 回		第 3 回		第 4 回
Dialog BAR	12月11日 18:00 ~ 21:00	1月29日 18:00 ~ 21:00		2月26日 18:00 ~ 21:00				
Gathering			2月1日 14:00 ~ 17:20		3月8日 14:00 ~ 17:20			
Design						2月15日 13:00 ~ 17:00	3月15日 10:00 ~ 17:00	3月16日 10:00 ~ 17:00

ワークショップの工程表

上記に説明した全4回のワークショップは、構成上、第1, 2回目のワークショップでは意見を出す雰囲気をつくることを目的とし、第3回目でイノベーションを起こすための意見の発散を狙い、最後の4回目のワークショップで集約を行うという、アウトプットを目的としている。

後述するが、地方の大学が担う産学連携には、地域連携が核となりイノベーションを創出する仕組み作りが大切であることから、地域住民の協力はもとより、大学の門戸が開いていることを広く知ってもらうところからの活動が必要となる。また、このことは、都心部の大学では得ることのできないイノベーションの創出が期待できることから非常に意味があり、重要であるといえる。徳島大学の取り組みが地方大学に与える影響は大きい。

① 1回目のワークショップについて

ア. ワークショップの概要

● ワークショップの目的・テーマ

お互いの活動やこれまでの成果、そのもととなる信念や価値観について共有し合い、アイデア構築の基盤となる参加者間の相互理解及び信頼構築を行うことを目的とし、3部構成によるワークショップ、Dialog BARを2回、Gatheringを1回行った。

● ワークショップ設計に当たっての仮説・狙い

地方大学の担う地域連携によるイノベーションの創出は、地域住民・企業との対話から始まるということを仮説と設定した。

これまで産学連携を行うためにコーディネータが1対1によるヒアリングをベースとして大学とのマッチングを行ってきたのだが、大勢の前では本心をつたえないということから1対1によるヒアリングが主流となった。しかし、多数の意見を募り、その中で集約することが大きなイノベーションを起こす可能性を秘めており、多数の賛同を得た意見は、より具体的なニーズであることから対話を行う意味がある。

そこで、より多くの参加者がいる中で意見を募る雰囲気づくりが大切であること、すなわち大学による「対話する場の提供」が必要であり、地域住民に対して大学が門戸を開いていることをより意識できることを狙うこととした。

● 使用した対話の手法

ミラツクの「Dialog BAR」、「Gathering」手法を用いた

● 参加者の状況（人数・性別・職業等の分布）

別紙「参加者の状況」参照

● ワークショップの会場（写真等含む）

① 第1回ダイアログBAR

場所：徳島大学 蔵本キャンパス 大塚講堂小ホール



② 第2回ダイアログBAR

場所：徳島大学 常三島キャンパス 工業会館



③ 第1回ギャザリング

場所：徳島大学 常三島キャンパス

大学開放実践センター3階（インテリジェントラボ）



● スケジュール（実施期間、実施時間等含む）

① 第1回ダイアログBAR

平成25年12月11日 18:00～21:00

② 第2回ダイアログBAR

平成26年 1月29日 18:00～21:00

③ 第1回ギャザリング

平成26年 2月 1日 14:00～17:20

● ファシリテーターについて（どのような人物が行ったか）

ファシリテーターはミラツクの西村勇也氏として実施した。

ミラツクは、”未来を創る”をテーマに、対話を通じて、異なるセクター、異なる地域、異なるステークホルダーの間に協力を生み出し、より良い社会に向けたInnovation（イノベーション）を生み出すことを目指しており、その代表を務める西村氏は地域における対話の経験が豊富であり、徳島大学の目指す地域連携を核としたイノベーションの創出には非常に適した人材である。

ミラツクの主な事業内容：

1. 地域とセクターを超えた協力を通じて1人1人の生み出すソーシャルイノベーションがより大きな力となるためのコミュニティづくりに取り組みます。
  2. より良い地域と社会をつくる若手リーダーが自分たちの力で取り組むアクションやプロジェクトをサポートします。
- ファシリテーションの実施状況（効果・課題等含む）

西村氏によるファシリテーションは発言や参加を促したり、話の流れを整理したり、参加者の認識の一致を確認したりする際に、コーディネータによくある自分の意見の主張など、話の流れを故意的に整理することなく、進めることができる点では、非常に優れていた。

第1回目は、参加者も緊張もあつてか意見があまり出ない傾向にあつたため、2回目以降にその課題を念頭に置いたファシリテーションを行ってもらった。



第1回 Dialog BAR 風景



第2回 Dialog BAR 風景



第1回 Gathering 風景



#### イ. ワークショップの検証

- 設計に当たっての仮説・狙いと実際に行ったワークショップとの比較・検証  
ワークショップの目的

お互いの活動やこれまでの成果、そのもととなる信念や価値観について共有し合い、アイデア構築の基盤となる参加者間の相互理解及び信頼構築を行うことを目的としていた。

実際のワークショップにおいても、まずは相互理解が必要であることを十分に把握し、実際にファシリテーターも経験豊富なミラツクの西村氏が行うことで、焦らずに情報共有ができた。

#### ワークショップの方法論・手段

徳島大学は、地域連携を核に考え、その分野でも経験豊富なミラツクがファシリテートすることとしていたため、実際計画した際の手段等にも、実際

実施したワークショップとも差異なく実施できている。

このことから、ファシリテーターは場の雰囲気作りにも大きく貢献していることから、これからのコーディネータも必要な能力であると考ええる。

- ワークショップを通じて新たな視点、考え方、着眼点等（インサイト）が得られたか。得られたとすれば、それは何に起因しているのか。（得られなかったとすれば、それは何に起因しているのか）

第1回目のワークショップを通じて得られた、新たな視点としては、大学は地域に対して知の還元をすべく門戸を開いているというものの、地域の人々や地元の中・小企業はそう捉えられておらず、逆に、いつまでたっても敷居の高い高学府であるイメージが強いということが分かった。さらには、このような“対話“を行うことで少しでも「大学は近寄りがたいところではない」ということが理解されたようである。特に、今回のワークショップは、できるだけ地域からの参加者に、“実際対話に参加する”という「場の提供」に力を入れたことで、大学がこんなにも身近であったのかという理解を得られるコメントも寄せられた。

第1回目のワークショップでは2回の Dialog BAR、1回の Gathering を行ったが、当初は話を聞くことに徹していた参加者が、回を重ねるごとに、どんどん話題の中に参加していく様子が近くからうかがうことが出来たことを起因とし、「地域連携を核とした対話の重要性」という新たな視点および考え方が得られた。

- ワークショップ等の運営から得られる効果・課題・改善点はどのようなものがあったか。

ワークショップの運営においては、“対話をする場の提供“ということもあり、対話するための場所選びも重要であることが分かった。大学では基本的に講義室等は十分あるが、リラックスして対話できるという場所が少ないことが課題であると考ええる。

大学内の設備だけで対話する場所を選定せずに、いろいろな公共施設等も候補として考えるのが良い。

- 上記課題・改善点を実際にどのように次のワークショップ等にフィードバックしたか

まずは、大学内の施設でいろいろと検証するのが良いということで、候補となる施設を見学し選定するようにした。

#### ウ. ワークショップのアウトプット等

- 産学官連携活動につながるどのようなアイデア・コンセプト等が発掘されたか

第1回ワーキングでは、お互いの活動やこれまでの成果、そのもととなる信念や価値観について共有し合い、アイデア構築の基盤となる参加者間の相互理解及び信頼構築を行うことを目的としていたため、産学官連携活動につながる

どのようなアイデア・コンセプト等の発掘までは至らなかった。

#### 第1回 Dialog BAR での主なトピック

トピック1：大学附属図書館をたくさんの人に利用してほしい

トピック2：大学生が楽しく学ぶには？

トピック3：外国語の学び方について

トピック4：農業の後継者問題

トピック5：project management について

トピック6：野菜をたくさん食べるには？

#### 第2回 Dialog BAR での主なトピック

トピック1：ひきこもり活用術

トピック2：農業系のイベントの集客

トピック3：地域の「就活」

トピック4：神山町でのイベントに人を呼ぶ方法

コ・ワーキングスペースに定期で来てくれる人をどう増やすか

トピック5：学生に届く素敵なデザインって何？

トピック6：若手農家が集まるイベントやワークショップに対する案

#### 第1回 Gathering ゲストスピーカー：

NPO 法人 ALIVE LAB 代表理事 上田啓人氏：

ALIVE LAB の活動（主に食育）の裾の緒を広げたい

「元気になろう会」主宰 三木かなめ氏：

（課題をあげられず）

人參農家 佐野健志氏：

大学との連携について

徳島大学 地域創生センター長 吉田敦也氏：

フューチャーセンターin 徳島大学のプログラム

- 発掘されたアイデア・コンセプト等についてどのような活動を行ったか（プロトタイピング、調査研究等の実施状況について）

上述したように、第1回目のワーキングでは産学連携につながるようなアイデア・コンセプトの発掘はできなかったが、ここで得られたものは、学内研究者に対してフィードバックすることで、これまで以上に地域との連携が必要であるということ、研究者も地域からの意見を欲していることが分かった。

- 上記の結果を次のワークショップにどのようにフィードバックしたか

第1回目のワーキングでは、アイデア構築の基盤となる参加者間の相互理解及び信頼構築を行うことを目的としていたが、この目標は達成されたといえる。今回、2回に及ぶ Dialog BAR、1回の Gathering により、参加者の大学に対する意識の変化、そして、自由に意見を言える雰囲気作りに成功したといえる。そこで、第2回のワーキングではこの結果を生かし、雰囲気を保ったまま、高度化することができるよう、場の雰囲気を支えている参加者を発掘することを課題設定とし、フィードバックを行った。

## ② 2回目のワークショップについて

### ア. ワークショップの概要

- ワークショップの目的・テーマ

集合知の形成を主目的とし、健康長寿に関する徳島県内の課題や技術・制度・地域での取り組みについての情報や経験知を参加者間で高度に共有した。

第1回ワークショップにて“対話”の経験のある参加者も多くなってきておりより密度を高めるため、このワークショップでも2部構成とした。

ここではDialog BARを1回、Gatheringを1回行った。

- ワークショップ設計に当たっての仮説・狙い

第2回目のワークショップも、第1回目と同様に大学が広く「対話する場の提供」を行うということに狙いを定めた。

- 使用した対話の手法

ミラツクの「Dialog BAR」、「Gathering」手法を用いた

- 参加者の状況（人数・性別・職業等の分布）

別紙「参加者の状況」参照

- ワークショップの会場（写真等含む）

- ① 第3回ダイアログBAR

場所：徳島大学 常三島キャンパス 工業会館



- ② 第2回ギャザリング

場所：徳島大学 常三島キャンパス

共通教育4号館404講義室（リベラホール）



- スケジュール（実施期間、実施時間等含む）
  - ① 第3回ダイアログBAR  
平成26年 2月26日 18:00～21:00
  - ② 第2回ギャザリング  
平成26年 3月 8日 14:00～17:20
- ファシリテーターについて（どのような人物が行ったか）  
第1回目と同様、ファシリテーターはミラツクの西村勇也氏として実施した。
- ファシリテーションの実施状況（効果・課題等含む）  
第1回目同様、ファシリテーターをミラツクの西村氏に依頼して実施した。  
その中でも第3回 Dialog BAR では話題提供を「プロジェクトの実行を実現するクラウドファンディングの力」として行った。この話題提供から、参加者のトピックを得ることとした。今回のテーマは徳島県というところには遠い内容であることから、話題提供に用いるテーマの選定が課題である。



第3回ダイアログBAR



第2回ギャザリング

#### イ. ワークショップの検証

- 設計に当たっての仮説・狙いと実際に行ったワークショップとの比較・検証

#### ワークショップの目的

集合知の形成を主目的とし、健康長寿に関する徳島県内の課題や技術・制度・地域での取り組みについての情報や経験知を参加者間で高度に共有した。

第1回目と2回目のワーキングは主に参加者間の情報共有を目的としていたためミラックによるファシリテーターが進めることで十分な効果が得られた。

参加者の対応もスムーズになり、参加することに主体的になった点では参加者も成長したといえる。

#### ワークショップの方法論・手段

参加者が戸惑わないように、第2回目も第1回目と手段は特に変えることをせずに行った。このことで参加者からの意見も徐々に出るようになったといえる点であると考ええる。

- ワークショップを通じて新たな視点、考え方、着眼点等（インサイト）が得られたか。得られたとすれば、それは何に起因しているのか。（得られなかったとすれば、それは何に起因しているのか）

参加者の成長は早く、大学側から“対話をするための場の提供”は地域連携においても重要な役割を担っているという新たな視点が得られた。実際に参加すると、当初は恥ずかしがって意見が出なかったが、回を重ねるごとに意見も活発に交わされるようになり、楽しんで参加している人も増えたことが“対話をするための場の提供”の重要性を物語っていると考ええる。

- ワークショップ等の運営から得られる効果・課題・改善点はどのようなものがあったか。実際にどのように次のワークショップ等にフィードバックしたか

前回の課題として、対話を行う場所の雰囲気について記述したが、参加者も慣れてくると、場所が毎回変わることに戸惑いがあることもあった。また、参加者の中には前回と会場が同じであると勘違いして遅れる場面も見られたため、さらなる参加者に対するフォローが課題となった。

次回以降は、開催直前にしっかりと連絡を取り、HPやfacebookを利用して会場に対する案内を強化することとした。

#### ウ. ワークショップのアウトプット等

- 産学官連携活動につながるどのようなアイデア・コンセプト等が発掘されたか

第2回目のワーキングでは、健康長寿に関する徳島県内の課題や技術・制度・地域での取り組みについての情報や経験知を参加者間で高度に共有し集合知の形成を主目的としていたため、産学官連携活動につながるどのようなアイデア・コンセプト等の発掘までは至らなかった。

#### 第3回 Dialog BAR でのトピック

トピック1：農業でどのようにすればカラダに負担がかからないのか

トピック2：これからの林業

トピック3：瀬戸内の弓削島を活性化していくためには

トピック4：松山のシャッター商店街をどう使うか

- トピック 5 : 再生エネルギーで得た利益を使って幸せな社会へ
- トピック 6 : (小松島の高校教員) 高校にどうなってほしいか。
- トピック 7 : カンボジアで商品を流通させるためには？
- トピック 8 : ゼロからの町の活性化
- トピック 9 : 高校生向けサマースクールの実施

第 2 回 Gathering ゲストスピーカー :

NPO 法人グリーンバレー KVSOC 企画・運営担当 浦山一世氏 :

しごと公民館の今後の運営について

徳島県南部総合県民局 産業交流部 井形圭治氏 :

国定公園 50 周年のイベントの広報

徳島大学産学官連携推進部 井内健介氏 :

大学を気軽に使ってもらうには

有限会社檜山農園 檜山直樹氏 :

(課題をあげられず)

- 発掘されたアイデア・コンセプト等についてどのような活動を行ったか (プロトタイピング、調査研究等の実施状況について)

第 2 回ワーキングも、第 1 回目のワーキング同様に産学連携につながるようなアイデア・コンセプトの発掘を主目的としておらず、より意見を活発に得られるような雰囲気づくりが大切であると考え実施した。しかし、中には参考となる意見も寄せられたため、ここで得られたものは、前回同様、学内研究者に対してフィードバックすることで、これまで以上に地域との連携が必要であるということ、研究者も地域からの意見を欲していることが分かった。

- 上記の結果を次のワークショップにどのようにフィードバックしたか

第 1 回、第 2 回とワーキングを進めるにつれて、参加者が場の雰囲気にも慣れ始め活発な意見を得られるようになった。そこで、話題の中心人物となるようなメンバーをしっかりと選定し、次回以降のワーキングでも中心人物となるようフィードバックを行った。

ここで選定したメンバーは、今後も地域連携を核としたイノベーション創出の際には重要なキーマンとなると考え、今後の活動のため産学官連携推進部においてもフィードバックすることとした。

### ③ 3回目のワークショップについて

#### ア. ワークショップの概要

- ワークショップの目的・テーマ

テーマ「徳島の健康度を高めるための”塩分／糖分の摂取量を減らす”  
野菜の摂取量を増やす”アイデアづくり」

ビジョンを参加者間でつくることを主目的とし、どのような社会が実現されれば少子高齢化先進県として高齢者はじめ県民の幸せを持続できるのか、またどのようなプロセスによってそれは可能になるのかを、対話によって明らかにするため、Designを2回行った。

これまでのワークショップの参加者を中心にメンバーを構成することで、対話によるアウトプットの精度をよりよくする工夫をして実施している。

- ワークショップ設計に当たっての仮説・狙い

今回のワークショップでは、徳島県についての調査報告をもとに、参加者の話題提供、さらに徳島県の“健康”をキーワードとして得られた情報をもとに議論することとした。この情報については、事前に参加者に対して共有することとした。

- ◇ 糖尿病疾病率全国1位（ワースト1）

- ◇ 人口10万人あたりの医師数/歯科医師数/薬剤師数が全国1位

- ◇ 徳島市では、日本において自転車所有率が1番高い  
（すなわち、自転車をよく利用している市である）

- ◇ 野菜摂取量は、全国において男性47位、女性46位

- ◇ 菓子パンの消費量が全国1位

以上の情報を参加者により共有することで、ワークショップで得られるアイデアをより精度高いものとするを狙いとした。

- 使用した対話の手法

ミラツクの「Design」手法を用いた

- 参加者の状況（人数・性別・年齢・職業等の分布）

別紙「参加者の状況」参照

- ワークショップの会場（写真等含む）

- ① 第1回デザイン

場所：徳島赤十字病院



② 第2回デザイン

場所：徳島大学 常三島キャンパス カフェテラス



- スケジュール（実施期間、実施時間等含む）
  - ① 第1回 Design  
平成26年2月15日 13:00～17:00
  - ② 第2回 Design  
平成26年3月15日 10:00～17:00
  
- ファシリテーターについて（どのような人物が行ったか）
  - ① 第1回 Design  
ファシリテーターはミラツクの西村勇也氏として実施した。
  - ② 第2回 Design  
健康社会+designにファシリテーターを依頼した。  
代表である笥祐介氏を中心に若手スタッフが進めたが、経験不足な点も見受けられた。
  
- ファシリテーションの実施状況（効果・課題等含む）
  - ① 第1回 Design  
ここでは、ゲストスピーカーからの話題提供を行い、クロストークセッションを行うことで第2回のDesignに向けての予備的なアイデアを出す場と位置付けた。  
特に今回のDesignでは調査の結果により、オランダから Marcel de Haan（マーセル・デ・ハーン）氏をゲストスピーカーとして招聘し、オランダの農業について話題提供を行った。農業国として、その先進的な取り組みについて紹介された。ここでは徳島県も農業県としての取り組みを推進するための情報提供とし、参加者に対しての情報共有を行った。



第1回デザイン

## ② 第2回 Design

データ調査とエスノグラフィー調査による情報共有の後、3つの方法でアイデアを広げた。:

### 1)現場の声からアイデアをつくる

データ調査とエスノグラフィー調査による情報共有を聞きながら、気になったことをポストイットに書き留めていく。1人1束のポストイットが配られ、1人で1束を使い切るように指示。情報共有の後に、グループを作ってグループ内で気づきを共有し、また似たキーワードを集めてマッピングを行った。

### 2)事例カードからアイデアを作る

一件関係の無さそうな、様々な取り組み事例を集めた30種類の事例カードを配付。興味を持った事例を集め、グループ内で共有し、同時に聞きながら生まれたインスピレーションをポストイットに書き留めていく。

### 3)接点カードからアイデアを作る

異なる視点となる60種類の接点カードを配付。異なるアイデアを強制的に結合させて新しいアイデアを生み出していく。生まれたアイデアをポストイットに書き留めていく。

アイデアの種が広がったのちに、グループ内で投票を行い、具体化する際に核となるアイデアを選出。一人1つの核となるアイデアを持って、アイデアごとのストーリーをプロトタイピングし、中間プレゼンテーションを行った。



第2回デザイン

## イ. ワークショップの検証

- 設計に当たっての仮説・狙いと実際に行ったワークショップとの比較・検証（可能であれば、ワークショップの目的、方法論、手段に分けて記載してください。）

### ワークショップの目的

どのような社会が実現されれば少子高齢化先進県として高齢者はじめ県民の幸せを持続できるのか、またどのようなプロセスによってそれは可能になるのか、以上の点についてビジョンを参加者間でつくることを主目的とした。

実際のワークショップでは長時間にわたり、アイデアを出すために集中したため、参加者の疲れが目立ったが、参加者の満足度も高かった。しかしながらファシリテーターの進行において参加者に対する配慮も必要であると感じた。

### ワークショップの方法論・手段

参加者がこれまで経験したことがない、長時間によるアイデアを出す手段であり、今回ファシリテーターを担当した健康社会+designが実施した。計画でも、アイデアを絞り出すということで長時間行うこととしていたが、若手スタッフによるファシリテーターの実力不足で参加者の疲労が目立った結果となった。

- ワークショップを通じて新たな視点、考え方、着眼点等（インサイト）が得られたか。得られたとすれば、それは何に起因しているのか。（得られなかったとすれば、それは何に起因しているのか）

第3回のワークショップではアイデアを絞り出すこととなっていた。1日かけてアイデアを出すという経験をするのは少なく、実際に産学連携を行う場面でも取り入れることによって、発想を得ることが必要である。

- ワークショップ等の運営から得られる効果・課題・改善点はどのようなものがあったか。

会場内での進行はファシリテーターに依存するところが大きく、参加者の満足度もファシリテーターに依存するといってもよい。今回のワークショップは1日利用したものであり、参加者の疲労も目立ったことから、ファシリテーターの教育が課題である。その教育も実際ワークショップを経験しなければ上達しないこともあり、運営の点からのフォローを行うようにした。

- 上記課題・改善点を実際にどのように次のワークショップ等にフィードバックしたか

ファシリテーターを変えることも考えられるが、参加者の不安をあおることは避けたいために、運営側によるフォローを徹底した。特に、参加者に対して伝わらないような場面がある際には運営スタッフも参加者へフォローに入るといったきめ細かいサービスを行った。

- 参加者からの意見の集約

ファシリテーターの実力は参加者もすぐに察知するようで、アンケートでも不満が目立った。

ウ. ワークショップのアウトプット等

- 産学官連携活動につながるどのようなアイデア・コンセプト等が発掘されたか

第1回目の Design ワークショップではテーマを「健康社会” 徳島” をつくる未来とそのため課題」としてクロストークセッションを行ない第2回 Design への情報提供を行った。

クロストークセッションのスピーカー

栢下淳子氏 (徳島赤十字病院院 栄養課)

茨木昭行氏 (小松島市 産業振興課)

山中英生氏 (港づくりファンタジーハーバー小松島 理事

／徳島大学大学院ソシオテクノサイエンス研究部 教授)

檜山直樹氏 (有限会社檜山農園)

清水愛子氏 (aging matter プロジェクト)

第2回目の Design ワークショップでは以下のアイデアが対話によって得られた。

アイデア1 : 歩いておいしい、楽しい、嬉しい、徳島健康 MAP

アイデア2 : たっぷり使える体感! 半分だけ砂糖

アイデア3 : にっこり長寿リゾート

アイデア4 : いつでもどこでもとこところボ

アイデア5 : 運動会で食育

アイデア6 : 阿波踊りに糖尿病の蓮をつくる

アイデア7 : お遍路のアプリ

アイデア8 : 徳島の食生活、うそほんとの調査

アイデア9 : ソイパン、減糖菓子の商品開発

アイデア10 : ゆっくり食べる給食

アイデア11 : 菓子パンを野菜パンへ

アイデア12 : 野菜ホテル

アイデア13 : 野菜デザート

アイデア14 : お医者さんカフェ

アイデア15 : Vege bar

アイデア16 : 糖尿病疑似体験

アイデア17 : 野菜づくしツアー

アイデア18 : 簡単、旬彩、冷凍、野菜パック

アイデア19 : コミュニティ農業

アイデア20 : 野菜デザートからつくる野菜社会

アイデア21 : 機能性野菜を使ったカフェ

アイデア22 : 家の外でも気軽に野菜ジュース

アイデア23 : 野菜チップスを会議に!

#### アイデア 24： 野菜入り徳島うどん&徳島ラーメン

- 発掘されたアイデア・コンセプト等についてどのような活動を行ったか（プロトタイプング、調査研究等の実施状況について）

上記のアイデアをもとに、第4回ワークショップでさらにブラッシュアップすることにしたため後述する。

- 上記の結果を次のワークショップにどのようにフィードバックしたか

上述したが、第3回のワークショップの目的が、意見の発散が狙いであるため第4回のワークショップにより今回の意見の集約を行うことになっている。

#### ④ 4回目のワークショップについて

##### ア. ワークショップの概要

- ワークショップの目的・テーマ

テーマ「徳島の健康度を高めるための”塩分／糖分の摂取量を減らす””野菜の摂取量を増やす”アイデアづくり」

健康長寿社会に向けてどのようなイノベーションが起きればそれが可能になるのかを、技術・制度・ライフスタイルの各側面からアイデアを創出して全体で共有し、さらにそこから社会のニーズが高く実現可能性が高いもの参加者間で絞り込む作業を行った。

ここでも第3回ワークショップ同様に Design を1回行ったが、このワークショップでは第3回ワークショップのアウトプットの精度をよりよくすることを目的とした。

- ワークショップ設計に当たっての仮説・狙い

今回のワークショップは、全4回のワークショップの集大成である。第3回目で発散させたアイデアを集約することを狙い、アイデアのブラッシュアップを行った。

- 使用した対話の手法

ミラツクの「Design」手法を用いた

- 参加者の状況（人数・性別・職業等の分布）

別紙「参加者の状況」参照

- ワークショップの会場（写真等含む）

デザイン

場所：徳島大学 常三島キャンパス カフェテラス



- スケジュール（実施期間、実施時間等含む）

平成26年3月16日 10:00～17:00

- ファシリテーターについて（どのような人物が行ったか）  
健康社会+design にファシリテーターを依頼した。  
代表である笈祐介氏を中心に若手スタッフが進めたが、経験不足な点も見受けられた。
- ファシリテーションの実施状況（効果・課題等含む）  
共感軸と実現軸を両立することを手がかりに、それぞれのアイデアをグループワークでブラッシュアップしていった。ブラッシュアップの方向性を見つけた後に、アイデアの使用シーンを描くストーリーシートを使ってプロトタイプングを再度実施。最終プレゼンテーションを行った。



デザイン

#### イ. ワークショップの検証

- 設計に当たっての仮説・狙いと実際に行ったワークショップとの比較・検証  
（可能であれば、ワークショップの目的、方法論、手段に分けて記載してください。）

##### ワークショップの目的

健康長寿社会に向けてどのようなイノベーションが起きればそれが可能になるのかを、技術・制度・ライフスタイルの各側面からアイデアを創出して全体で共有し、さらにそこから社会のニーズが高く実現可能性が高いもの参加者間で絞り込む作業を行った。

実際のワークショップでも第3回のワークショップで得たアイデアを参考に、絞り込みの作業に移った。

##### ワークショップの方法論・手段

第3回目のワークショップと同様に、参加者がこれまで経験したことがない、長時間かけてアイデアを絞り込む作業であり、ファシリテーターを担当した健康社会+design が実施した。

第3回目では、アイデアを絞り出すことに長時間かけて行ったが、今回はそのアイデアを集約する段階となった。若手スタッフによるファシリテーターの実力不足で参加者の戸惑いが目立った結果となった。しかしながら前回の改善

点でもあげたようにスタッフのサポートにより、最終的には大きな問題も生じることなく終了することができた。

実際にファシリテーターに依存する対話については、場の雰囲気づくりに左右されるため、一概にコーディネーターが行うというよりは、慣れないうちは熟練者に依頼して行うほうがより良いアイデアを得られると考えられる。

- ワークショップを通じて新たな視点、考え方、着眼点等（インサイト）が得られたか。得られたとすれば、それは何に起因しているのか。（得られなかったとすれば、それは何に起因しているのか）

産学連携を行うために“対話”を行うという手法はイノベーションの創出の一つの手であると考えられる。複数の参加者により意見を発散させ、それを集約する作業は容易ではない。ワークショップを通じて、大学の視点では得られない、新たな切り口を得られることも研究者の今後に良い影響を与えることができる。まずは、対話する場の提供が必要不可欠である。

#### ウ. ワークショップのアウトプット等

- 産学官連携活動につながるどのようなアイデア・コンセプト等が発掘されたか

第4回目のワークショップは、これまでのワークショップの集大成ともいえるもので、特に第3回目のワークショップでいろいろと発散させた意見の集約を行い以下のアイデアを得ることができた。

アイデア1： 塩分量を計ってくれる、リス型塩入れ

アイデア2： 糖尿病デーin 徳島

アイデア3： ゆっくり給食を食べよう！

アイデア4： メタボマウンテン

アイデア5： 親子で健康運動会

アイデア6： 医者カフェ

アイデア7： ベジBAR

アイデア8： 野菜会議

アイデア9： 野菜アピール

アイデア10： 野菜旅行

アイデア11： いろどりポッキー

アイデア12： 地元のおばあちゃんの”おすそわけ野菜”スイーツ

アイデア13： 徳大かあちゃん食堂

アイデア14： ベジガール花嫁修業ツアー

アイデア15： 生野菜専用ジュース自販機

アイデア16： 小分けでおいしく冷凍パック

アイデア17： 農業遊園地

- 発掘されたアイデア・コンセプト等についてどのような活動を行ったか（プロトタイプング、調査研究等の実施状況について）

上記のアイデアについて、産学連携に結びつくかどうか調査を行った。まず、

先行調査を行うことで先行事例がないか調べた。また、内容について産学官連携推進部にて議論を行ったが、大学で研究を行うという視点では、さらなる対話でブラッシュアップするのが良いという意見も出ている。

別紙「参加者の状況」

別紙

参加者の状況

	所属機関・部署等		第1回 <sup>ア</sup> イロク <sup>ク</sup> Bar		第1回 <sup>ア</sup> フォーセ <sup>セ</sup> ン <sup>ン</sup> セッション		第2回 <sup>ア</sup> フォーセ <sup>セ</sup> ン <sup>ン</sup> セッション		第2回 <sup>ア</sup> イロク <sup>ク</sup> Bar		第1回 <sup>キ</sup> ヤサ <sup>サ</sup> リング <sup>ク</sup>		第1回 <sup>キ</sup> イン <sup>ン</sup> セッション		第3回 <sup>ア</sup> イロク <sup>ク</sup> Bar		第2回 <sup>キ</sup> ヤサ <sup>サ</sup> リング <sup>ク</sup>		第2回 <sup>キ</sup> イン <sup>ン</sup> セッション		第2回 <sup>キ</sup> イン <sup>ン</sup> セッション		合計		
			12月11日		1月12日		1月17日		1月29日		2月1日		2月15日		2月26日		3月8日		3月15日		3月16日		男性	女性	
			男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性	
a	大学等	自然科学系研究者			14	10	14	1	2					2		3				2		2		39	11
b		人文・社会系研究者			1		2			1					2	1								5	2
c		技術系職員																						0	0
d		事務系職員	1	1				5		1	3	2	2	3	1		3	1	1		1			12	13
e		リサーチ・アドミニストレーター (URA)		1				1																0	2
f		産学官連携コーディネーター					1				3		2				3							9	0
g		学生 (大学院博士課程、修士課程、学部生)	2		2	1	1		2	1					2	1								9	3
h		上記a～g以外																						0	0
i		不明	7	6					4		3				2									16	6
j	企業	研究開発部門																					0	0	
k		事業企画部門						1															1	0	
l		経営部門																	1		1		0	2	
m		上記j～l以外																					0	0	
n		不明	15	3	3				6	1	4		6	2	8	5	3		8	1	8	1	61	13	
o	TLO																						0	0	
p	地方公共団体 (公設試験研究機関を除く)	3	3				2	2	2	1		6	1	6	4	1	1	3		3			25	13	
q	公設試験研究機関																						0	0	
r	財団法人・第3セクター等	5				2		3	1	3		9	1	4	2	2	1	2	1	2	1	2	1	32	7
s	そのほか (a～rのいずれにも該当しないような場合)	4	4	2	3			8		2		16	10	2	2	2	1	3	2	3	2	3	2	42	24
合計			37	18	22	14	20	9	28	7	19	2	43	17	30	15	14	4	19	5	19	5	251	96	

### 3. 本事業実施により得られた知見・課題等

#### (1) 本事業による一連の取組を通じて得られた知見・課題等

- 各機関において産学官連携活動にイノベーション創出に向けた対話型ワークショップ形式を加えることにより得られた成果・効果はどのようなものか。(担当者等の能力の向上や、学内外の協力体制等の変化等、事業の実施により実施主体である組織にもたらされた変化等を含めて記載してください。)それは何に起因しているのか。

これまでの産学官連携では、主に1対1による対話により行ってきたといえる。しかし1対1で得られるものには限界が来ており、さらなるイノベーションを創出するためには色々な意見を出して集約する場が必要である。

対話型ワークショップ形式をとることでいろいろな立場の人が集まり、奇想天外な意見が出ることは重要である、すなわち新しい気付きを得ることができる新しい手法であるといえる。

今回のワークショップでは、今後我々のような産学官連携に従事する教員や専門職員が対話する場を作った際に、ファシリテートする方法が得られたことは十分な成果であるといえよう。さらには、参加者から好評であったことからもうかがえ得るよう、今後も地域連携を核としたイノベーション創出のための“対話する場の提供”が必要であると分かったことは、大学が地域に対しての知の還元を行うための一つの手法であるという効果も得られた。

- 対話型ワークショップの実施に当たっての問題点・課題等(参加者からの意見、計画どおり実施できたこと・できなかったことの分析等を踏まえて)

今回のワークショップを通して言えることだが、地方大学での対話型ワークショップは、地域連携を核としたイノベーションの創出である。

計画書では全4回のワークショップを行い、第4回目のワークショップにて得られたアウトプットをもとに、技術面のアイデアについて、特許等の調査を行った。しかし、残念ながら、現状では先行調査の結果、特許となるようなものは得られなかった。そこで、今後は、この成果をブラッシュアップする機会を作ることが課題として残った。

しかしながら、本題である地域連携を核としたイノベーションの創出を行うための“対話を行うための場の提供”は計画通り実施できており、参加者から場の提供を継続してほしいという意見をかながみても、今回の取り組みは参加者から高評価を得られたと言えよう。

今後の課題は、ただ単に対話する場の提供にとどまらず、地域連携を行うためにも、産学連携についての教育を行いつつ、対話により得られるイノベーションをより精度良くしていくための仕組みをいかに作っていくかということである。

## (2) 今後の活動への展望

今回、徳島大学のイノベーション対話は産学連携を必ずしも視野に入れるものではなく、地域連携を核としたイノベーションの創出を目指しているところに特徴がある。

全体のワークショップを通して得られたことは、地域から大学に求められていることは大きく、大学は地域への知の還元をするため、門戸を広げているといわれつつも、実際の地域の方々は、どのようにアプローチしてよいかわからないといった意見もあったが、全体として今回のワークショップでは参加者の方々より非常に好評で、大学とのつながりを持つために、「このような“対話する場の提供”を行ってほしい」という意見が多く出た。

しかし、全4回のワークショップで検証した内容は、時間的制約もあり産学連携につながるシーズには到達できなかった。今後、今回の事業の結果を踏まえて、更なる検討が必要である。特に、大学の研究と繋がるテーマを作り上げるには、参加者の意識も必要であろう。

そこで、“対話する場の提供”をして地域連携を進めつつ、地域の方々に産学連携に関する教育を行うことでイノベーションにつながる思考の育成を行うことが今後の展望だと考える。

#### 4. その他

※ 文部科学省「イノベーション対話ツール」への要望等

地方大学に課せられたイノベーションの創出は、地域連携を核とした取り組みが必要不可欠であると言うのが今回の結果だといえます。今後も、徳島大学の取り組みを継続するためにも継続した支援を希望いたします。